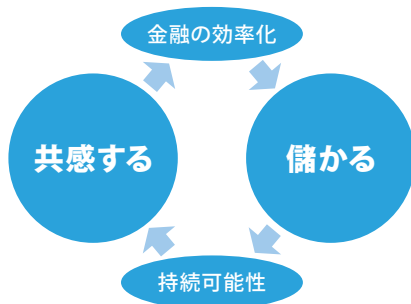




徹底的に考えた経験——日本FP学会論文へのチャレンジ

日本FP学会の論文執筆に挑戦し、日本FP協会奨励賞をいただいたのは2015年度のことだ。タイトルは『“共感マネー”が日本の金融を変える——直販系投信・クラウドファンディングの事例を中心とした考察』。投資信託の中でも販売会社に頼らず、消費者に直接販売することを重視するタイプの運用会社や、当時から広がり始めていたクラウドファンディングなどの意味合いについて論じた。金融が本来果たすべき役割を果たせていない状況がもどかしかった。膨大な個人金融資産を抱えながらそれが有効に活かされない現状をどう変えていくのか、自分なりに考えたかった。論文では、金融が経済の循環を促す血液のような役割を果たすために、“共感”という考え方を大事にすべきだと論じた。論文中の図表④「共感マネーの構図」は、この論文のキーコンセプトだ。

■ 共感マネーの構図(図表④再掲) —「共感する」と「儲かる」は不可分の関係



ひとや企業などに共感してお金を託す、信頼するという利他心と、その一方で儲けたい、損したくないという利己心。両者はいい塩梅にバランスさせるべき別々のものではない。密接にして不可分、両方がある初めて金融の効率性も経済の持続可能性も高まる——と論じた。渋谷栄一の『論語と算盤』などにも重ね合わせながら考えた。今思い返しても論文らしくないというか、アジテーションのようなテーストが色濃いのだが、それを自分なりに論理立てて組み立てることに腐心した。

なぜ当時、このような論文に挑戦しようと思ったのか——。私は新聞社で記者として働き始め、その後は系列のTV放送で仕事をしてきた。株式市況や個人の資産運用に関わる取材分野が長い。論文テーマは、取材分野の中で特に関心を持っていたテーマについて書いたものだ。書いたり、話したりすることは日常の仕事であるわけだが、それとは別に論文にチャレンジすることには自分なりに意味があったと考えている。記事も番組でのコメントも、限られた時間の中で、わかりやすく都合のよいストーリーを作りがちだ。取材先は、自然と自分の好きなタイプの人々に偏

第10回「日本FP協会奨励賞」

直居 敦氏(なおい・あつし)

日経CNBCコメンテーター、AFP認定者

1965年生まれ。1988年一橋大学社会学部を卒業後、日本経済新聞社に入社。証券部、日経マネー編集部、日経QUICKニュース記者などを経て2006年から日経CNBC。現在は朝のマーケット・経済番組「朝エクспレス」を中心に担当。



っていく——。本当にそれでよいのか？ 都合のよいストーリーを組み立てていないか？ どこまで明示的に考えていたかどうかは別にして、そうした思いが時間をかけて次第に積み上がっていたのだと思う。「論文に挑戦したい」と考えるようになった。

改めていろいろな先達の指導を仰ぎ、必ずしも金融分野ではない方々からも広い示唆をいただきながら論文を書き上げた。「安易に結論を出さない」「もう1回考えてみる」「反対側から見てみる」——。それらのことが高いレベルでできたとは正直言えないが、そのように自分を意識付けることを心掛けた。

論文執筆から数年が過ぎて、私は今でも証券市場や個人の資産形成などに関わる報道の仕事が続けている。時事的なテーマを扱っただけに、データも制度も企業も大きく変わった。それでも論文で考えた“骨格”は健在だと考えている。金融商品を考えるうえでは、運用サイドより販売サイドの問題のほうがはるかに大きいと今でも考えている。また、当時は自分の問題意識がまだ深まっておらず、論文でもあまり触れていないが、個人の側に寄り添って、金融資産や人生設計に関してアドバイスをしてくれる存在、アドバイザーの存在はますます大切になっていると感じている。振り返ってみて論文に挑戦したことで、自分のしている仕事の意味を徹底的に考えることができたことは小さくない意味があった。単純に「自信が付きました」とは言えないところがあるのだが、物事を考える軸みたいなのがしっかりしてきたような気はしている。

前述のように私自身は実務家としてのFPとは違う立ち位置の仕事をしている。ただ仕事柄、市場関係者のみならずアドバイザー、FPの方とお会いする機会が多いし、そうした仕事の役割はますます大切になっていると感じている。FPのみなさん、FPに関心のあるみなさんが日本FP学会の論文に挑戦したら、それぞれの仕事の意味、人生の意味をもう一度考える、深めるよいきっかけになるのではないだろうか。仕事をしながらの論文執筆はもちろん忙しく、少々辛い時期もあったけれど、自分では論文に挑戦したことで人生が断然楽しくなってきたと感じている。幅広いみなさんの挑戦を期待したい。